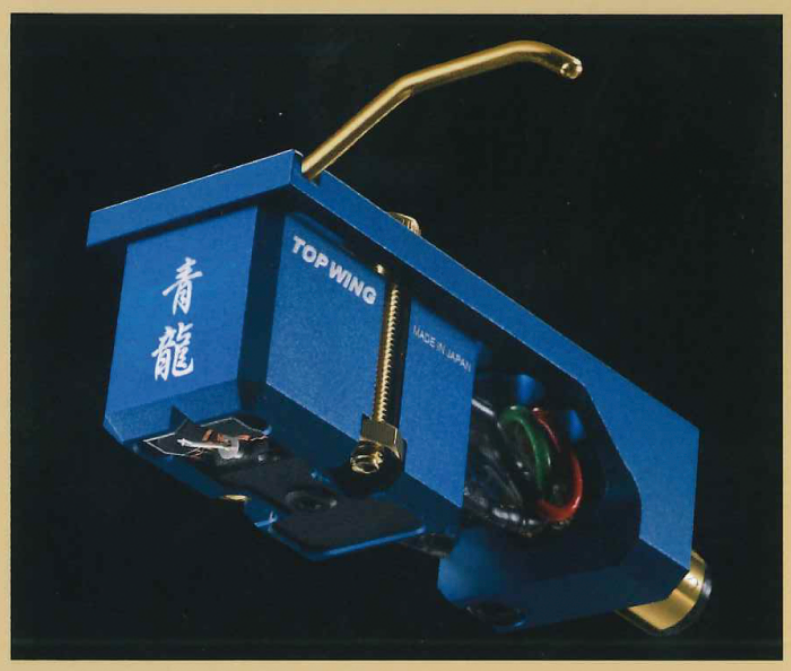
LPカートリッジ読本

主要31カートリッジ試聴記
こだわりの17ブランドの素顔を探る
名門の音を手軽に楽しむ普及機紹介
名人が講義「LPカートリッジを知る」
注目アクセサリー
針先の世界を見る
代表ブランドの市販LPハイファイカーリッジガイド

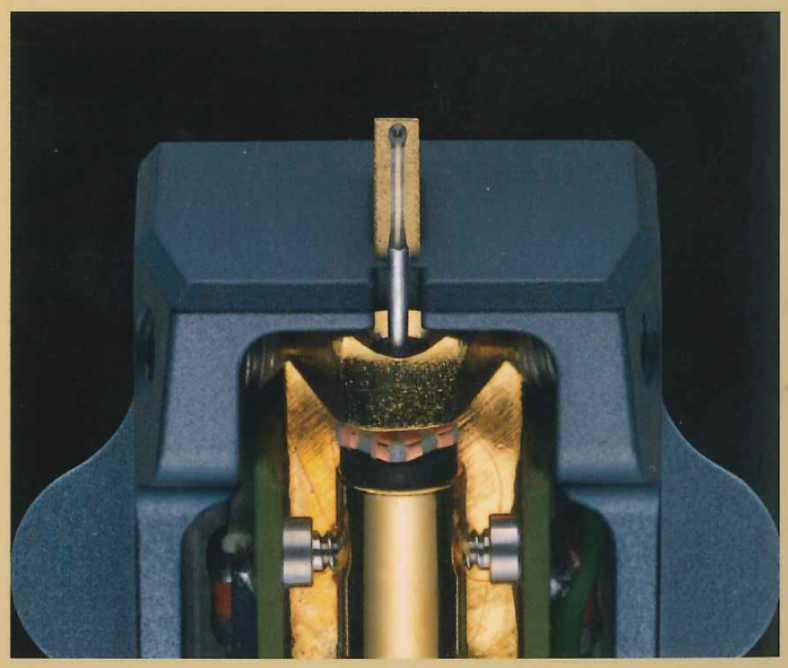
All about Hi-Fi LP Cartridge

Stereo編

ONTOMO MOOK
AUDIO



～小さなレコード針が実現する楽しみの世界



音楽之友社

NAGAOKA

第17回

(株)ナガオカ 長岡香江・西 武司

㈱ナガオカトレーディング営業部長　西 武司氏

㈱ナガオカの代表取締役社長　長岡香江氏

珍しいリボン型や MP方式のカートリッジを生み出す 持ち前の宝石研磨、精密加工の技術力で 世界のレコード文化を支える

LPレコード全盛の頃、レコード店には必ずナガオカの交換針が置かれていた。多くの音楽ファンが、ステレオに付属するピックアップの交換針でお世話になった。そのナガオカは交換針だけではなく、ジュエルトーンブランドで高級カートリッジに参入した。その後絶やさず独自のMP型カートリッジを世に送り続けている。今も昔も、宝石研磨や精密加工にまつわる産業に従事するナガオカ、その今のオーディオ事情を聞いてみる。

執筆：井上千岳

時計の宝石技術で起業 その後ダイヤの交換針で 一世を風靡した

アナログ世代のオーディオファンにとって、ナガオカといえば交換針のイメージが強いはずだ。一時はレコード店のショーケースにあらゆるブランドの交換針が並び、オーディオ製品を買ったことのない人でもナガオカの名前は誰でも知っていた。

しかしそのナガオカがまたダイヤモンド針、つまりスタイラスの世界的な供給元であることについては、意外に知られていないのではないだろうか。現在も接合針の生産では世界随一を誇る。また独自の方式によるカートリッジの開発など、高度な技術力を背景にした事業経営を展開した時期もある。現在はブランドをNAGAOKAとして新体制となった同社の歴史と現在を紐解きたい。なお今回お話を伺ったのは現社長長岡香江氏と、営業部長西武司氏のおふた方である。

「創立は昭和15（1940）年で、時計の軸受けに使う宝石（ルビーとサファイヤ）を作っていたんですね」。

年表を示しながら西氏が説明してくれた。創業者は長岡榮太郎氏。従業員30名の合資会社長岡時計部品製作所というのだそうだ。

「昔は時計で何石とかいいましたけど、その石です」。

セイコー、シチズン、オリエントと全て取り引きがあったそうだ。

「こちらの榮太郎氏が、サファイヤ針やダイヤモンドの交換針の実用化に日本で初めて成功して、叙勲されたりしていたんです」。

香江氏が指差したのは、室内に飾られた榮太郎氏の胸像である。

「ナガオカというのは昔からレコード針の技術が高くて、サファイヤ針の市販に着手したのが昭和22年になっています」。

ダイヤモンドの交換針も、昭和31年に開発に成功している。こういった技術力の高さを、再認識しておきたい。

昭和36年に ダイヤモンド接合針の 大量生産を可能にした

「昭和36年にダイヤモンド接合針の製造法が確立されて、それから交換針の大量生産が可能になったのです」と香江氏は説明する。

ところでその交換針だが、元々何の交換針だったのだろうか。

「ロネット型……何でしょうね」。

西氏が首を傾げながらいう。

ロネット型は圧電型のことで、オランダのロネット社のものが有名だったため、そう呼ばれることが多い。セラミックやクリスタル（ロッシェル塩）の圧電効果で出力電圧を得る方式で、SP後期からステレオ初期まで主流であった。先端にノブがついていて、引っ繰り返すとSP用にもなるターンオーバー型がよく見られたものである。

当初は進駐軍用の需要に応えて製造されたもののようだ。まだLPレコードはない。昭和30年に社名を長岡精機宝石工業株式会社に変更し、従業員は約100名となった。

ダイヤモンド交換針の一般市販は昭和42年からで、実用新案を取得していたプッシュ式蓄針の大量生産が可能になったことによる。

その後MM型が発売され、その交換針にも進出していく。レコード店で同社のショーケースをよく見るようになったのは、この頃から後のことである。また昭和38年には、榮太郎氏がスタイラスJIS制定委員に就任している。

「その当時はそれこそ、飛ぶ鳥を落とすような勢いだったようです」。

山梨県大月市と山形県東根市に工場を持ち、豊島区大塚に本社及び工場の社屋を建設。そして社名を株式会社ナガオカに変更するのが昭和45年のことである。西暦でいえば1960年代から70年代にかけて、高度成長を背景にしてオーディオの急速な普及と歩を合わせた形といえそうだ。

リボン型カートリッジを開発 ハイエンドブランド ジュエルトーンを設立

一方でこの時期、自前のレコード針を生かしたカートリッジの開発にも乗り出している。

昭和42（1967）年にリボン型カートリッジが発売されている。NR-1というモデルである。

「このNR-1だけがナガオカ・ブランドで出ているのです。その後のはジュエルトーンになっています」。

西氏が見せてくれたのは販売店向けのカタログで、ジュエルトーンはナガオカとは違うもうひとつ高級なブランドとして発足させたものだ。カートリ

㈱ナガオカの東京オフィス。山手線から見える看板は多くの人の知るところ

創業者、長岡榮太郎氏の胸像

㈱ナガオカの山形工場

ッジだけでなくアクセサリーでも数多くの製品が発売されたが、現在は一部を残してナガオカ・ブランドに吸収されている。

「これは全部無垢のダイヤモンドですね」。

資料のあちこちを見ていた香江氏はいう。接合だけでなく、無垢の針も作っていたわけである。

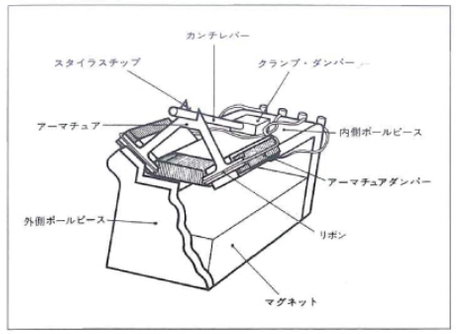
「NR・1の後JT・RⅡ、RⅢと続くんですが、これ（RⅡ）なんかはスケルトンでえらいかっこいいなと思うんです（笑）」。

西氏の説明では、当初は黒にする予定であったのが、塗料を入れると思音が変わってしまうのでやむなく透明のままにしたのだという。

リボン型というのは発電コイルをリボン状のワンターン・コイルとしたもので、インダクタンスが低く磁気回路のヒステリシスやバルクハウゼン効果を避けることができる。1950年代に英国フェランティ社が発表したモデルが我が国にも紹介されていたそうだが、高額なため数としてはわずかだったようだ。モノーラル時代のことである。

ワンターン・コイルだからインピーダンスが非常に低く、また出力も低い。初代のNR・1ではトランスを付属していたが、2代目からは別売りのRA・1という専用ヘッドアンプが開発された。それもJTシリーズと共に陳列ケースの中に収まっている。

ジュエルトーン　JT-RⅡ。当時¥38,000



リボンカートリッジの解説図

「この設計をされたOBの方が昨年亡くなったという話で……」。

どうやら後にアンプメーカーの設計者として著名になった人物らしい。

ダイヤモンドカンチレバーを装備したJT・RⅢDというモデルも発売されたことがある。

「相当なアカやったといいますよ（笑）。作れば作るほど赤字で、それでもイメージを上げるために作れということで」。

スタイラス部分を本体に組みつける工程

山形工場でのカートリッジの製造工程。MP-500の端子のハンダづけ工程

音はよかったようだが、現在では製造技術もほぼ途絶え、海外製も含めて幻の方式となってしまったようだ。

「ジュエルトーンは高級機というより、二代目に経営が移った時に、頑張ろうということで何か新しいことを始めたかったのかもしれません」と香江氏。

初代榮太郎氏は昭和55年に亡くなり、栄一氏に代わった頃である。

「アメリカ招待というキャンペーンがあったのがその始めですね」。

宣伝もかなり活発、派手に行われていたようである。

ジュエルトーンではリボン型のほかにMM型も作られたようだ。最初はナガオカだったが、ジュエルトーンに代わって1970年代まで続く。しかしその後、MP型が開発されて姿を消した。

当時のカタログをよく見てみると、アーマチュアの傍にマグネットが置かれている。つまりIM（インデュースト・マグネット）型ですね、と西氏に訊くと、「そうです。ムービング・パーマロイでMP型というんです」という。

ジュエルトーンからナガオカに戻っても製造は続けられ、現在でもラインアップが揃っている。

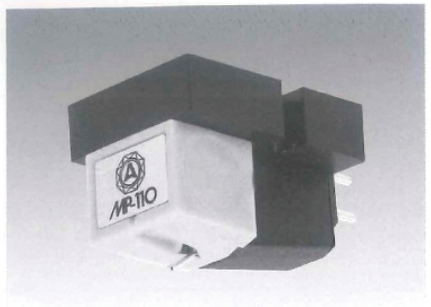
ところでカートリッジやその他の製品と交換針では、どちらがどれくらい売り上げは多かったのだろうか。

「往時は、それはもう圧倒的に交換針の方ですね。ほとんどのメーカーさんの針が揃ってましたし」

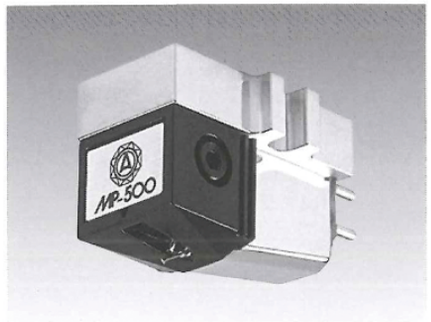
西氏の説明によると、メーカー針の方が安かったこともあるようだ。

「ロネットの時代は色んなメーカーさんが出してましたからね。その流れで、メーカー針より品質のいいものを作るということもあったようです」

つまり純正品より安いもので儲けようというのでは全くなかったわけだ。メーカー品より質のいい交換針というイメージだったのだろう。



人気のモデルMP-110　¥14,500



フラッグシップのMP-500　¥79,000

レコードクリーナーの名機アルジャントの試作機群

接合針のコストを抑えレコード文化の裾野を支えている

さて、こうして全盛期を迎えたナガオカだったが、CDの登場と共に危機を迎えることになる。そこでCDクリーナーなどのアクセサリーにも進出するが、1990年に会社を解散し、現在の体制に移行することになった。今では山形工場を（株）ナガオカとし、関連会社として大月に（株）ナガオカ精密、ここ東京千駄ヶ谷に（株）ナガオカトレーディングを構えて、いずれも香江氏が社長を務めている。

「山形工場は90人ぐらいですが、そのうちレコード針に関わるのは20～30人ぐらいです」。

職人さんの多くは、既に60歳代に達しているそうだ。熟練者である。接合針と楕円針では大きなシェアを持っている。

「よく接合針は安いといわれますけど、そうじゃないんですよ。当社が努力して値上げしないから、最終製品が安く作れるだけで……」。

大事なところなので、少し強調しておきたい。続けて香江氏はいう。

「機械も新しくするのではなしに、昭和の機械を直し直しして、部品のないものは社内で作るなどして続けているのです。それでできるだけコストを抑えて、レコード文化を守るために世界中に供給してるのです」。

金属のベース（主にチタン）にダイヤモンドを強固に融合してはいるが、先端のダイヤを削る技術は同じである。決して安かろう悪かろうではないのだ。

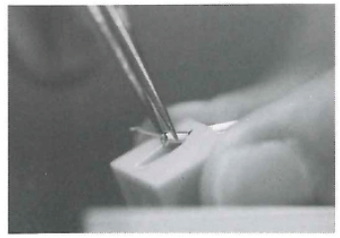
「それを接合針は安いからといわれると……」。

心外だということであろう。それは我々も心しておかなければならないことである。逆に充分な強度を保ちながら金属と接合し、それを研磨することの方がずっと難しいのかもしれない。

「そこを分かって頂きたい……」。

接合針では世界の90％以上、実質的にはほぼ全てが同社製だという。来年は創立80周年を迎えるそうだ。アナログを守るためにも、ぜひ頑張って続けていただきたいものである。我々も改めて強く応援したい。

MP-110のスタイラスアッセンブリーを顕微鏡で確認する



MP-110のカンチレバー挿入工程